松本市文化財調査報告No.181

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡Ⅷ

—緊急発掘調査報告書—

2006.3

松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡Ⅷ

―緊急発掘調査報告書―

2006.3

松本市教育委員会

例　言

1　本書は平成16年4月12日～5月28日にかけて実施された長野県南松本2丁目139番1他に所在する出川西遺跡第Ⅷ次発掘調査の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は株式会社東祥による店舗建設事業にともなう緊急発掘調査であり、同社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施、本書の作成を行った。

3　本書の執筆はⅠ：事務局、Ⅱ～Ⅳ：直井雅尚が行った。

4　本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄：百瀬二三子　　遺物復元：中澤温子　　遺構図整理：村山牧枝

遺物実測：白鳥文彦、竹内直美　　トレース：竹内直美、村山牧枝　　遺構写真：菊池直哉

遺物写真：宮嶋洋一　　編集：直井雅尚

5　本書で使用した遺構・遺物の略称は次のとおりである。

竪穴住居址→住、土器集中地点→土集、グリッド→G

6　遺構番号は本遺跡で通しとし、Ⅶ次調査（土集はⅥ次調査）を継承した。

7　本調査で得られた出土遺物及び測量図類、写真等の記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823　長野県松本市中山3738-1　TEL0263-86-4710　FAX0263-86-9189）に収蔵されている。

目　次

Ⅰ調査の経緯 …… 2

1 調査に至る経過 …… 2

2 調査経過 …… 2

3 調査体制 …… 2

Ⅱ遺跡の位置と歴史的環境 …… 4

1 遺跡の位置と地形 …… 4

2 出川西遺跡の過去の調査 …… 4

3 周辺遺跡 …… 4

Ⅲ調査の成果 …… 8

1 調査の概要 …… 8

2 遺構 …… 8

3 遺物 …… 10

Ⅳ調査のまとめ …… 13

1 出川西遺跡について …… 13

2 弥生土器について …… 15

写真図版 …… 16

抄録 …… 21

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

出川西遺跡は松本市南松本から双葉にかけて広がる周知の埋蔵文化財包蔵地である。このうちの南松本２丁目139番１他一帯に株式会社東祥による開発が計画されたため、平成16年３月２日から同月26日にかけて、松本市教育委員会が確認調査を実施した。その結果、開発範囲内の一部に遺物の包含が認められ、開発によって遺跡が破壊されることが明らかになったため、平成16年４月１月付けで株式会社東祥と松本市長菅谷昭の間で当該遺跡に関する発掘調査委託契約を締結して、松本市教育委員会が発掘調査を実施した。また、発掘調査終了後、16年度分の調査費の精算を行い、平成17年３月30日付けで変更契約を締結した。平成17年度は発掘調査報告書作成を行うことで前年と同様に委託契約を締結した。

2　調査経過

発掘調査は平成16年４月から５月にかけて実施された。開発区域内のうち試掘によって遺物の包含が認められた一帯に建設される建物２棟分の範囲に調査区を設定した。４月12日に現場事務所を設置し、同日から表土除去のため建設用重機（パワーシャベル）を導入して掘削を開始した。それに併せて４月19日から５月26日の間、作業員を導入し、人力による掘り下げを実施した。並行して測量作業を進め、５月28日に16年度の現場での作業を終了した。現場作業の終了後、平成16年６月２日付けで長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また、同日に松本警察署に埋蔵物発見届を行い、平成16年６月14日付けで長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定をうけた。

現場作業に引き続き出土品整理作業を市立考古博物館で実施した。平成17年度は引き続き、出土品整理作業を実施し、発掘調査報告書の作成を行った。

3　調査体制

【16年度】（発掘調査）

調 査 団 長：竹淵公章（松本市教育委員会教育長）

調査担当者：沢柳秀利（文化財保護課主任）、菊池直哉（同嘱託）

調　査　員：今村　克、森　義直

調査協力者：浅輪敬二、石井脩二、大月八十喜、上条道代、下条ちか子、兎川國明、中上昇一、中村恵子、藤本利子、堀内五郎、三沢栄子、蓑島菜奈、三代沢二三江、村山牧枝、百瀬二三子、横山　清

事　務　局：伊藤　隆（教育部長）、池田英俊（文化財保護課長）、熊谷康治（課長補佐）、川上百合子（係長）、小山高志（主事）、櫻井　了（主事）、渡邊陽子（嘱託）

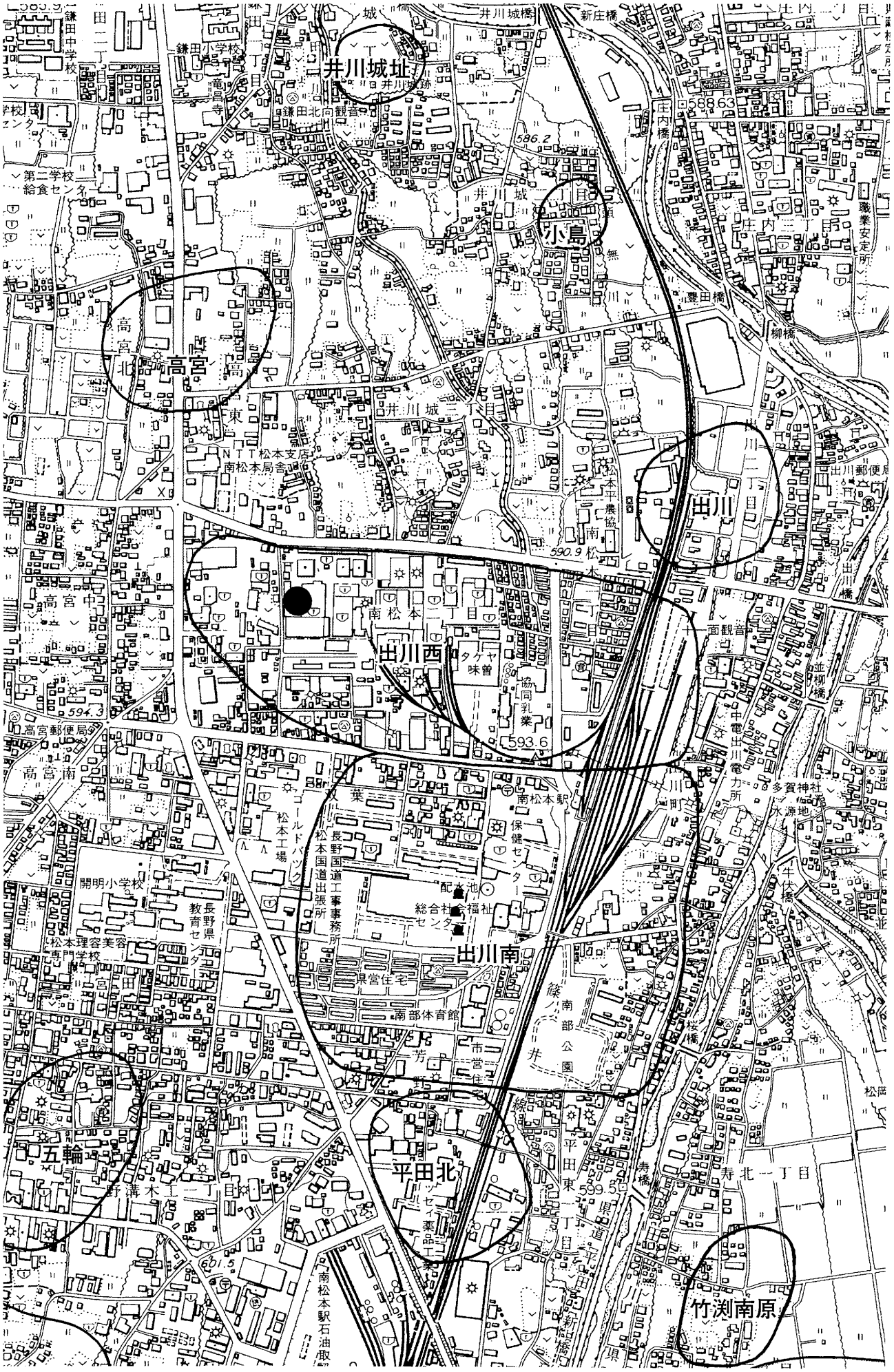
【17年度】（報告書作成）

担　当　者：直井雅尚（文化財課主査）

調　査　員：宮嶋洋一

整理協力者：白鳥文彦、竹内直美、中沢温子、村山牧枝

事　務　局：赤穂　優（教育部長）、宮島吉秀（文化財課長）、熊谷康治（課長補佐）、櫻井　了（主事）、渡邊陽子（嘱託）



黒丸は調査地

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

1　遺跡の位置と地形

出川西遺跡は松本旧市街南方の沖積地帯に位置し、現在の町名では南松本１丁目、同２丁目、双葉、高宮中に広がる広大な遺跡である。遺跡の一帯は第二次大戦前までは畑と水田であったが、軍需工場が疎開してきて、大規模な開発が行われた場所でもある。戦後も各種工場、倉庫が建ち並び、旧来の地形の眺望はまったく失われている。

地形を巨視的に見ると奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地の接する沖積扇状地性堆積の末端に位置し、主として奈良井川の影響を受けている。北から北北西にきわめて緩く傾斜し、調査地点付近では西の奈良井川現河床とは約1,600m、東の田川からは1,000mを測る。

2　出川西遺跡の過去の調査

過去７次の調査概略を一覧にすると下表のようになる。

第１表　出川西遺跡の過去の調査

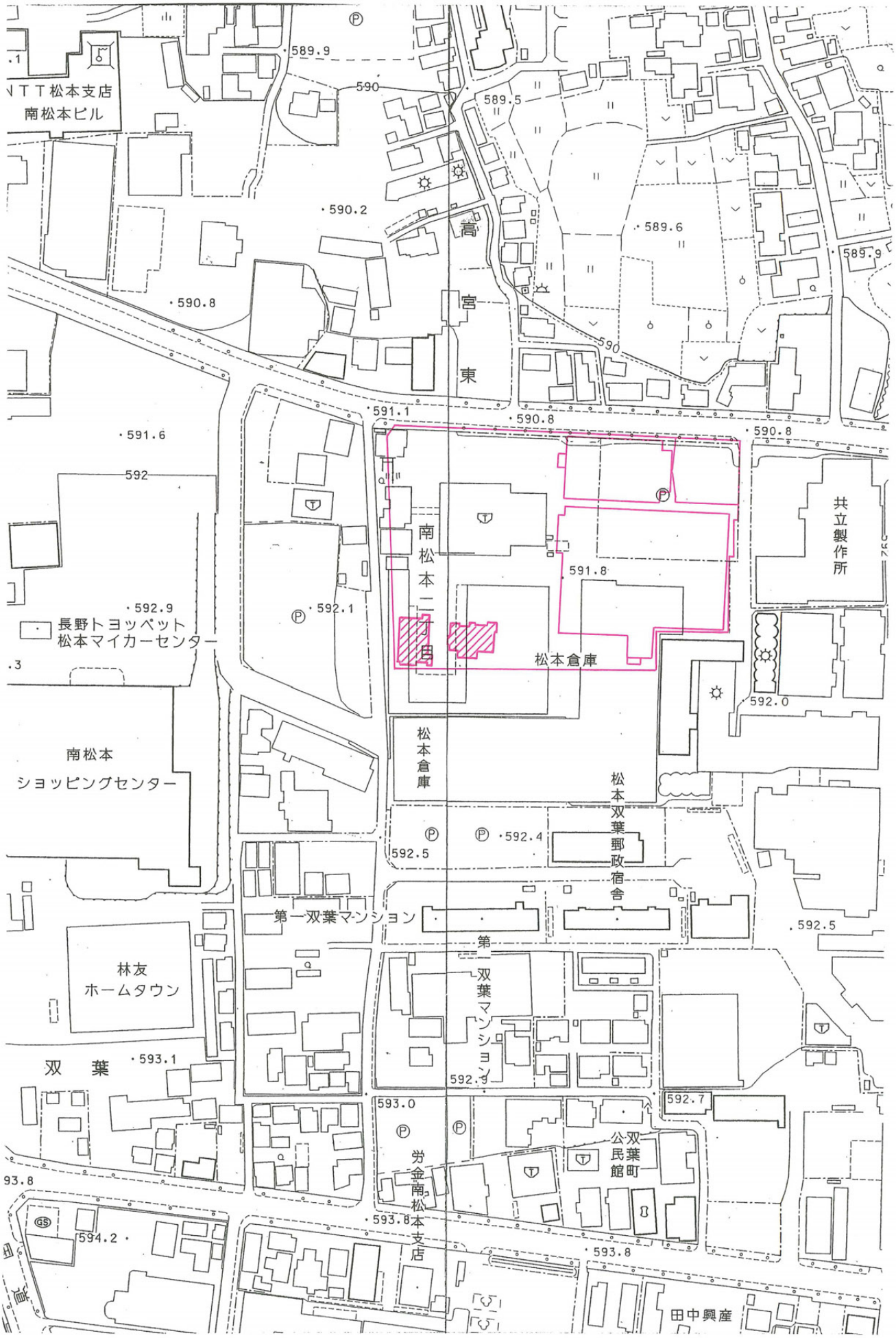
No.	年度	調査名称	調査原因	調査成果概要	備　　考
1	S60	出川（出川西Ⅰ）	市営住宅	弥生～平安住5	未報告
2	H5	出川Ⅲ	大規模店舗	古墳配石6	Ⅵと合冊で報告
3	H5	出川西Ⅱ	工場	弥生住1	遺物のみⅥで報告
4	H7	出川西Ⅲ	市営住宅	近世・近代の遺構	未報告
5	H7	出川西Ⅳ	市営住宅	古墳住1、掘建1、溝	未報告
6	H8	出川西Ⅴ	市営住宅	平安住1、溝	未報告
7	H8	出川西Ⅵ	大規模店舗	古墳土集19、配石1	松本市文化財調査報告No.135
8	H13	出川西Ⅶ	南松本保育園	平安住9、溝	未報告

調査地点は広大な遺跡範囲の東西各地なので、時期や遺構に一定の傾向は認めがたいが、弥生から平安までの複合的な時期の遺跡として把握できる。特に平安期の遺構は遺跡の東側に分布する特徴がある。今回調査地に隣接するのは平成５年の出川Ⅲ次調査と、同８年の出川西Ⅵ次調査であるが、古墳時代中期の配石と土器集中地点の検出は、今回の調査結果とは大きく異なる。地点によって様相を異にしていることを示している。

3　周辺遺跡

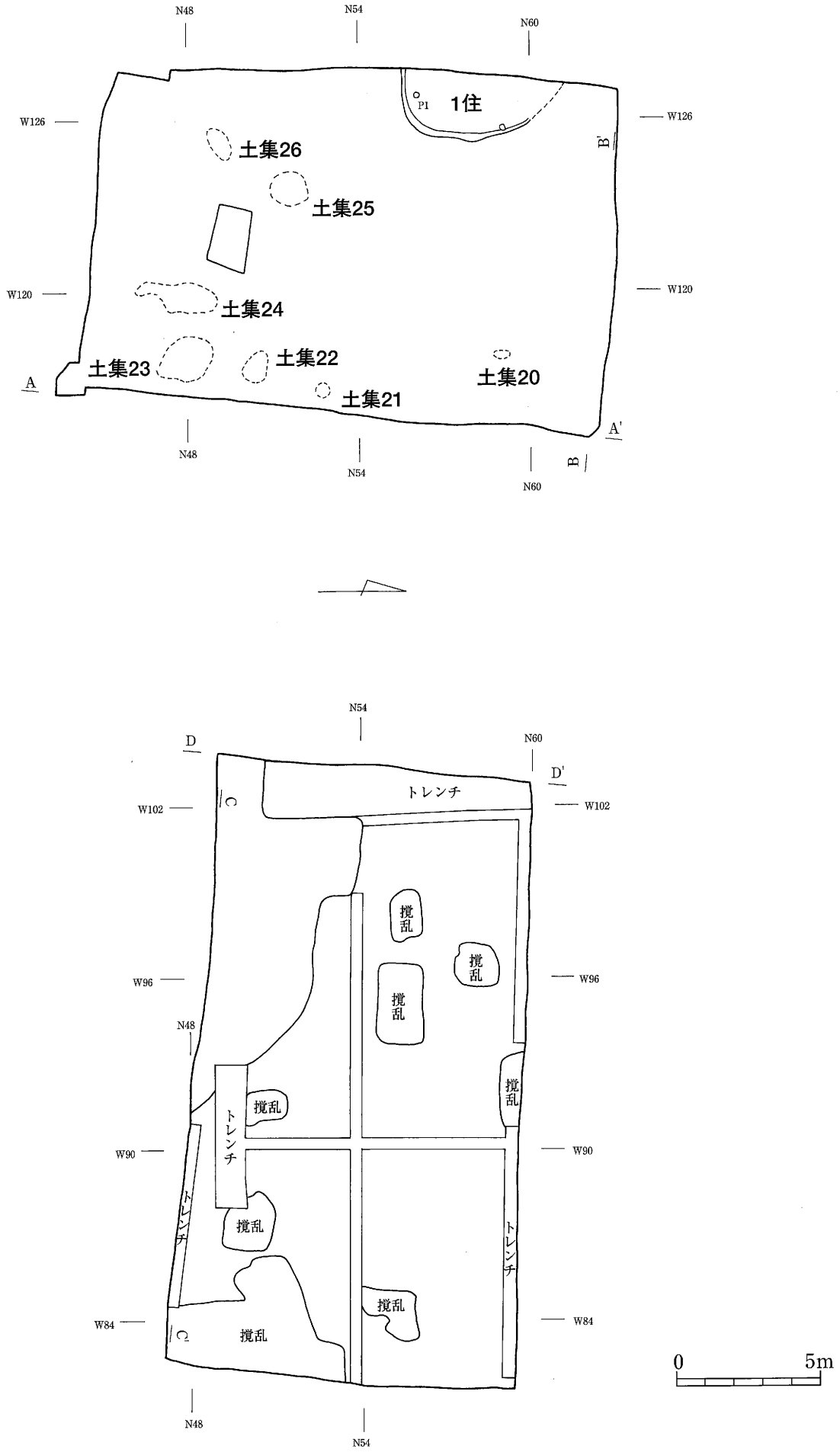
本遺跡より北には北東に出川遺跡、北西に高宮遺跡があり、いずれも過去に発掘調査が行われている。特に高宮遺跡では平成５年から同15年までの４次にわたる調査で古墳時代中期の竪穴住居址８、土器集中区22を確認しており、土器集中区は湧水に関わる祭祀跡と推定されている。出川遺跡は平成元年に発掘調査が実施され、中世から近世にかけての遺物と遺構が検出されている。本遺跡の南には隣接して出川南遺跡があり昭和61年から平成14年にかけて12次にわたり発掘調査が行われている。東部で弥生時代後期、中央部から西部では古墳時代後期～平安時代の竪穴住居址が計200軒以上検出されている。更に南に続く平田北遺跡では６次の調査で古墳時代末期から平安時代前半にかけて27軒の竪穴住居址と10棟の掘立柱建物址などが検出され、出川南遺跡から連続する大集落遺跡であることが判明している。

北部の井川城址は小笠原氏の居館跡と伝えられるところであるが、発掘調査は未だ行われておらず、内容は不明である。小島遺跡も同様で内容の把握に至っていない。

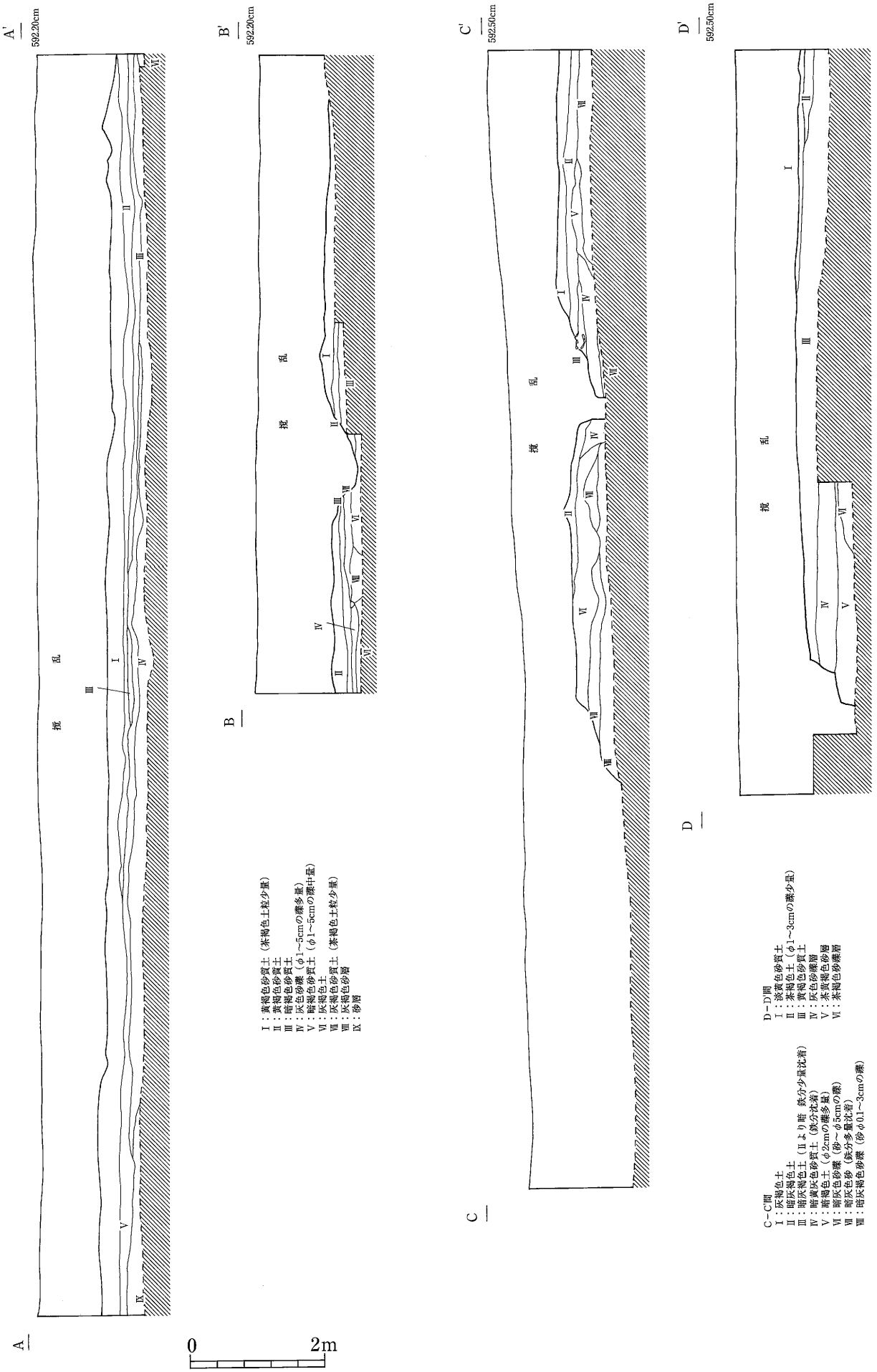


第２図　開発範囲と調査地

（赤斜線が調査地）


N48
N54
N60
W126
W120
W102
W96
W90
W84
P1
1住
土集26
土集25
土集24
土集23
土集22
土集21
土集20
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
トレンチ
撹乱
0
5m

第3図　調査地全体図


A'
592.20cm
B'
592.20cm
C'
592.50cm
D'
592.50cm
撹乱
A
B
C
D
0
2m
Ⅰ：黄褐色砂質土（茶褐色土粒少量）
Ⅱ：黄褐色砂質土
Ⅲ：暗褐色砂質土
Ⅳ：灰色砂礫（φ1～5cmの礫多量）
Ⅴ：暗褐色砂質土（φ1～5cmの礫中量）
Ⅵ：灰褐色土
Ⅶ：灰褐色砂質土（茶褐色土粒少量）
Ⅷ：灰褐色砂層
Ⅸ：砂層
C－C'間
Ⅰ：灰褐色土
Ⅱ：暗灰褐色土（Ⅱより暗　鉄分少量沈着）
Ⅲ：暗灰褐色土（鉄分沈着）
Ⅳ：暗黄灰色砂質土（φ2cmの礫多量）
Ⅴ：暗褐色土（φ2cmの礫多量）
Ⅵ：暗灰色砂礫（砂～φ5cmの礫）
Ⅶ：暗灰色砂（鉄分多量沈着）
Ⅷ：暗灰褐色砂礫（砂φ0.1～3cmの礫）
D－D'間
Ⅰ：淡黄色砂質土
Ⅱ：茶褐色土（φ1～3cmの礫少量）
Ⅲ：黄褐色砂質土
Ⅳ：灰色砂礫層
Ⅴ：茶黄褐色砂層
Ⅵ：茶褐色砂礫層

第４図　調査地土層図

Ⅲ　調査の成果

1　調査の概要

今回の調査は出川西遺跡の第Ⅷ次調査にあたる。新たに建てられる予定の建物2棟分の地区を対象に調査区を設定し、西側をＡ区、東側をＢ区とした。両調査区を覆う3ｍグリッドの原点の国家座標はＸ＝23,400、Ｙ＝－47,900である。グリッド名は北東隅の座標名とした。調査面積はＡ区211㎡、Ｂ区247㎡で計458㎡を測る。しかし、Ｂ区は半分以上が戦時中の開発等で遺物包含層が削平されており、主な遺構と遺物はＡ区から検出された。

遺構は弥生時代後期に属する竪穴住居址が1軒のみ検出され、他に土器集中地点が7地点認められた。遺物は弥生土器が多数と少量の土師器が出土しているが竪穴住居址には伴わないものが多い。

調査地の土層はＡ区北壁と東壁、Ｂ区西壁と南壁で観察したところ、上半部はほとんどが近現代の埋め土で、それ以下ではほぼ水平に堆積しているが、対応する土層の観察からは、Ａ区からＢ区方向にむかってわずかな微高地状の地形を呈していたことがわかる。遺物包含層は厳密にしぼり切れなかったが、Ａ区第Ⅲ～Ⅴ層、Ｂ区Ⅰ・Ⅱ層（Ｃ－Ｃ′間）が相当する。

2　遺構

(1) 竪穴住居址（第5図）

第18号住居址が、N57～63W123～126グリッドから検出されている。おそらく西側の半分以上が調査地区外にかかっており、南北5.7ｍ、東西2.4ｍの範囲を捉えたにすぎない。中央部と推定される一帯に推定直径2.5ｍの範囲で炭化物が広がっており、その中央部に土器を埋設した炉がある。炉体土器は壺形土器の上半（第6図6）を正位に埋設したもので、底面にも土器片を敷き、内部に焼土と炭化物が伴っていた。また炉体土器の外縁にも別の土器（第6図2）が並べられていた。本址はⅢ層ないしⅣ層中から掘り込まれていると推定され、壁は東壁全部と北・南壁の東側部分を想定したが、東壁の一部と、南東隅を検出できたにすぎない。壁高は確認部分で最高20㎝を測る。遺物出土は高杯（第6図1）が南東壁下に転がっていた他は、炭の分布範囲の北側を中心に、土器の破片が約20点と礫が4点存在した。竪穴住居址の時期は、出土土器からみて弥生時代後期に属する。

(2) 土器集中地点（第3図）

土器集中地点20～26まであり、いずれもＡ区のⅢ～Ⅴ層中に確認された。

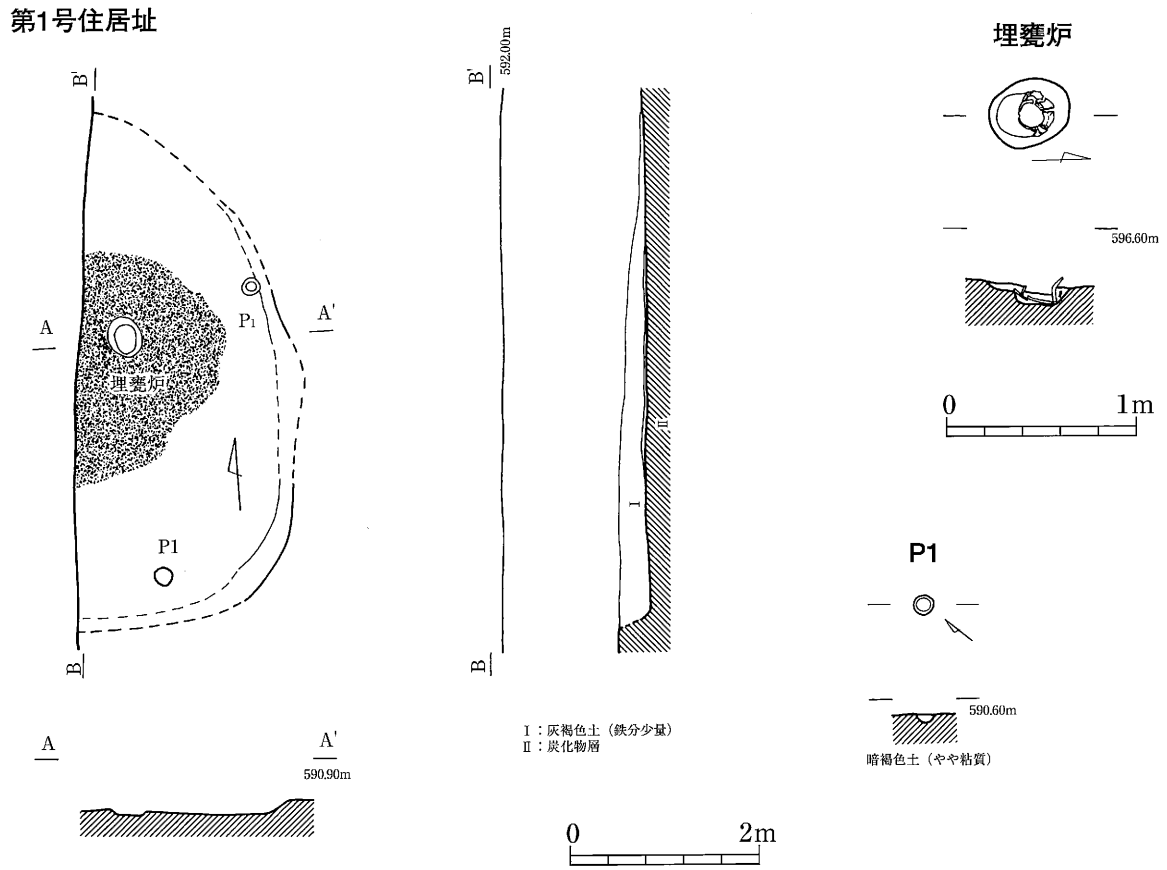
土器集中地点20はN60W117グリッドで検出され、南北50㎝、東西30㎝ほどの範囲に約10片ほどの土器片からなる。土器1点を実測図化、2点を拓影で示した（第6図8、第8図45・46）。

土器集中地点21はN54W114グリッドで検出され、直径50㎝ほどの範囲に10数片に割れたほぼ同一個体の土器片で構成される。実測図化できた1点（第6図9）は土器集中地点23からの破片と接合している。

土器集中地点22はN51W114～117のグリッドで1ｍくらいの範囲にやや広がって検出された。約20片の土器片よりなり、礫を2点含んでいた。土器片はほとんどが同一個体（第7図30）で、土器集中地点23及び26と接合し壺の大破片となった。

土器集中地点23はN48～51W114～117グリッドにかけて存在し、2×1.5ｍほどの範囲に50点以上の土器片が密集して分布した。実測図で提示できたもの11個体、拓影5個体（第6図10～20、第8図47～51）に及び、多様性が認められた。礫を1点含む。

土器集中地点24は約3×1ｍと南北に細長く、N48～51W117～120のグリッドにかけて広がっていた。30点以上の土器片からなるが、実測図で提示できたものは4個体、拓影4個体（第6図21～24、第8図52～55）である。



第５図　第18号住居址

3点の礫を含む。

土器集中地点25はN48～54W123グリッドにあり約1mの範囲に10数点の土器片と4点の礫が散在している。土器は4個体を実測図化し、1個体を拓影（第7図25～28、第8図56）で示した。紡錘車とみられる土製品1点（第7図43）も出土している。

土器集中地点26はN51W123グリッドで1.2×0.7mの範囲に10数点の土器片と2点の礫がまとまっている。ほとんどの土器片は土器集中地点22と接合した。

(3) グリッド

住居址、土器集中地点に属さない遺物はグリッド出土品として扱った。出土量は多いが集中度が低いため、土器集中地点とはなり得ないと判断したものである。遺物はいずれも第Ⅲ～Ⅴ層から出土した。Ａ区で土器実測図7点、拓影7点を、Ｂ区で土器実測図2点を提示している。

(4) Ｂ区土器単独出土

Ｂ区の南壁際から、土師器の甕（第7図41）が単独で出土している。周辺から同様の遺物出土はなかったが、土層図と合わせ見るとなんらかの遺構があった可能性が高い。

3　遺物

土器と石器がある。石器は人為的に持ち込まれたと推定される礫ばかりだが、加工や使用の痕跡が認められなかったので、取上げは行わなかった。土器は弥生土器とわずかに土師器があり、総量はＡ区、Ｂ区、試掘トレンチ等から37.85Kgが出土した。そのうちＡ区出土分が33.57Kgと大半を占める。残存度の良いものや紋様が良く分かるものについて出土地点別に実測図と拓影で図化提示した。

(1) 弥生土器（第6・7図1～39、第8図44～63）

39点を実測図、20点を拓影で提示した。壺形土器（以下「壺」と略す。他の器種も同様。）、甕、高杯、鉢、甑がある。甕の破片数点を除き、後期のものと推定する。

①壺

実測図で8点（第6図6・7・14・15・18・24・第7図27・30・32・35）、拓影で4点（第8図48・56・61・62）を提示したが、全形がわかるものはない。実測図化したもののうち紋様構成がわかるのは、6・24・32で、24と32は櫛描横線紋を歯数の少ない同様原体で縦に切るＴ字紋が施紋される。拓影資料でも、56・61・62で同様な傾向が認められる。さらに24にはＴ字紋の下に円形浮紋が付される。これに対し、6は頸部に櫛描簾状紋が巡り、その上下に間隙をおいて櫛描波状紋が配されるいわゆる多段帯状施紋になっている。甕に類似する紋様構成をとっているが、外形が壺形を呈しているので壺に含めて然るべきと考えた。30は大形の壺の胴部下半と推定する。15は胴部と頸部の間に稜をなす強い屈曲を有し、土師器に含まれる可能性がある。

②甕

実測図が18点、拓影で15点を提示したが、ほぼ全形がわかるものは6図20の1点のみである。いずれも緩く括れる頸部から長めの口縁部が外開する外形を呈す。紋様は横位の櫛描波状紋の施紋が主体となっており、頸部に櫛描簾状紋を巡らす個体は、実測図で示したものの中にはなく、拓影に4点みられるのみである。この櫛描簾状紋の出現頻度の低さは特徴的と言ってよいであろう。31は口唇部に縄紋が施紋されるが、口縁部の外形は他の後期に属する甕と大差なく、同時期のものと推定する。

太い斜条痕を持つ破片を拓影で2点（第8図46・57）提示できたが、いずれも弥生中期初頭ないしは中葉に遡る可能性のあるものと考える。

③高杯

全形を知り得るものはない。3点を実測図で示した。1は大きく外開する形態をとらず脚部に見えるが、内外面に赤彩が認められ、杯部とした。29は大形の鉢の口縁部の可能性もある。

④鉢

全形を知り得るものはない。形態から見て22の1点が相当すると判断したが、器面調整にミガキが認められないので甑の可能性もある。

⑤甑

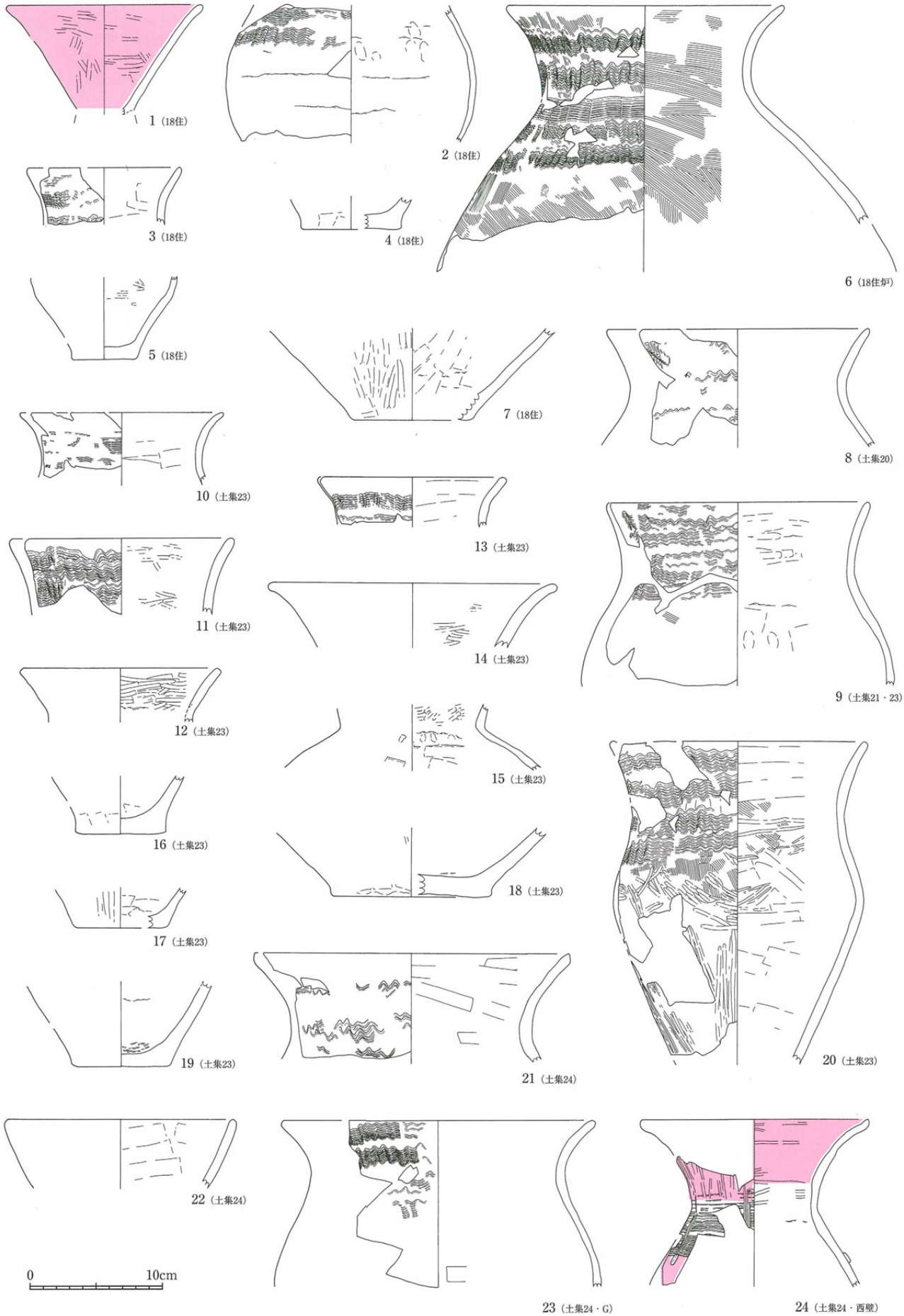
36・38の2点がある。全形を知り得るものはない。平底の底部に1孔を有する。

(2) 土師器（第7図40・41）

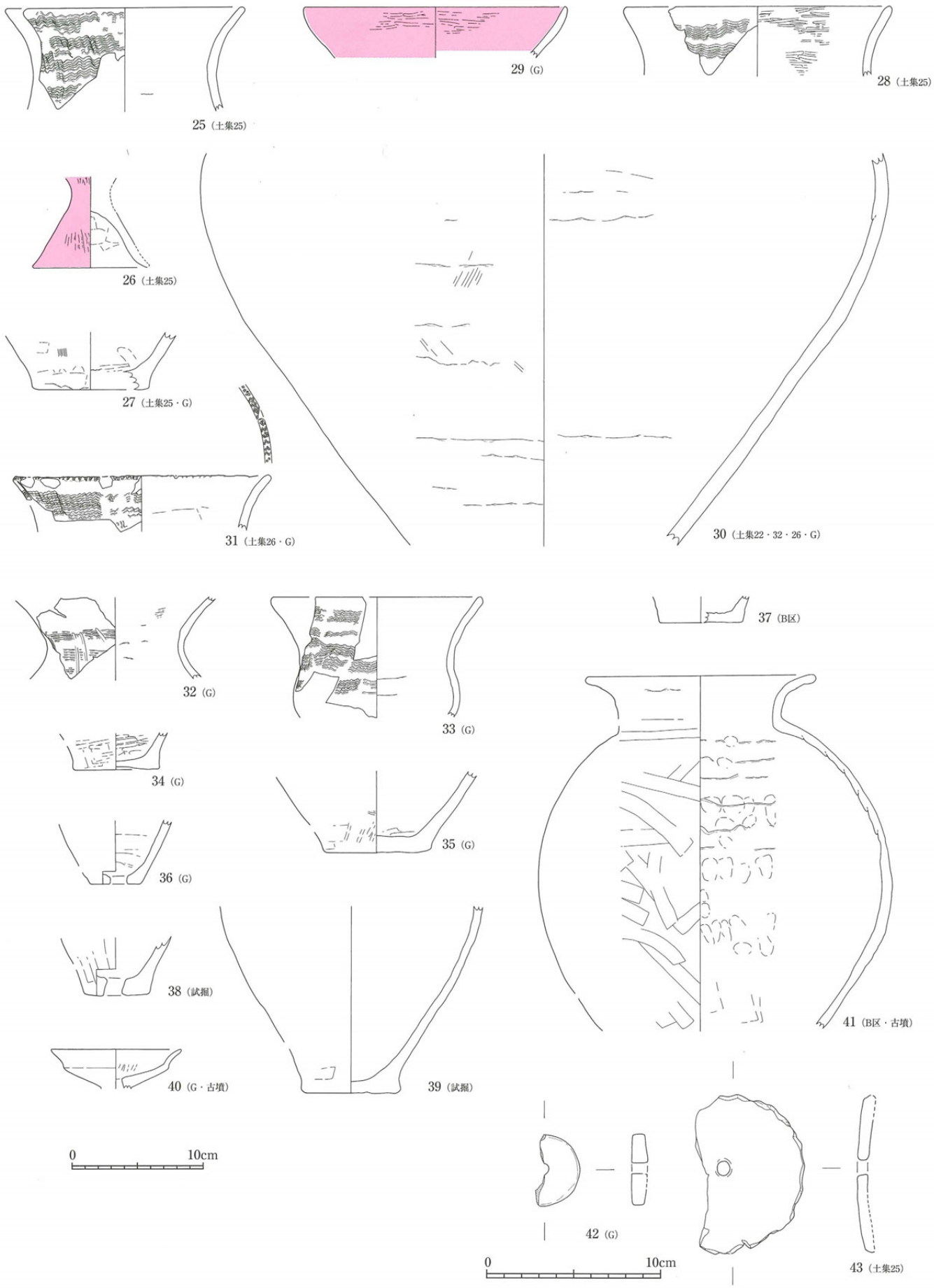
グリッド出土の40の小型器台の器受け部と、Ｂ区出土の41の甕が相当する。器台は稜を持って外反する形態である。甕はほぼ全形がわかるもので、口径19.6cm、最大胴径27.1cm、推定器高30cmを測る。内面調整が粗雑で、上半部は粘土紐の接合痕が顕著に残り、指頭圧痕が明瞭に観察される。器台は古墳時代前期、甕は古墳時代前期～中期に属すると推定する。

(3) 土製品（第7図42・43）

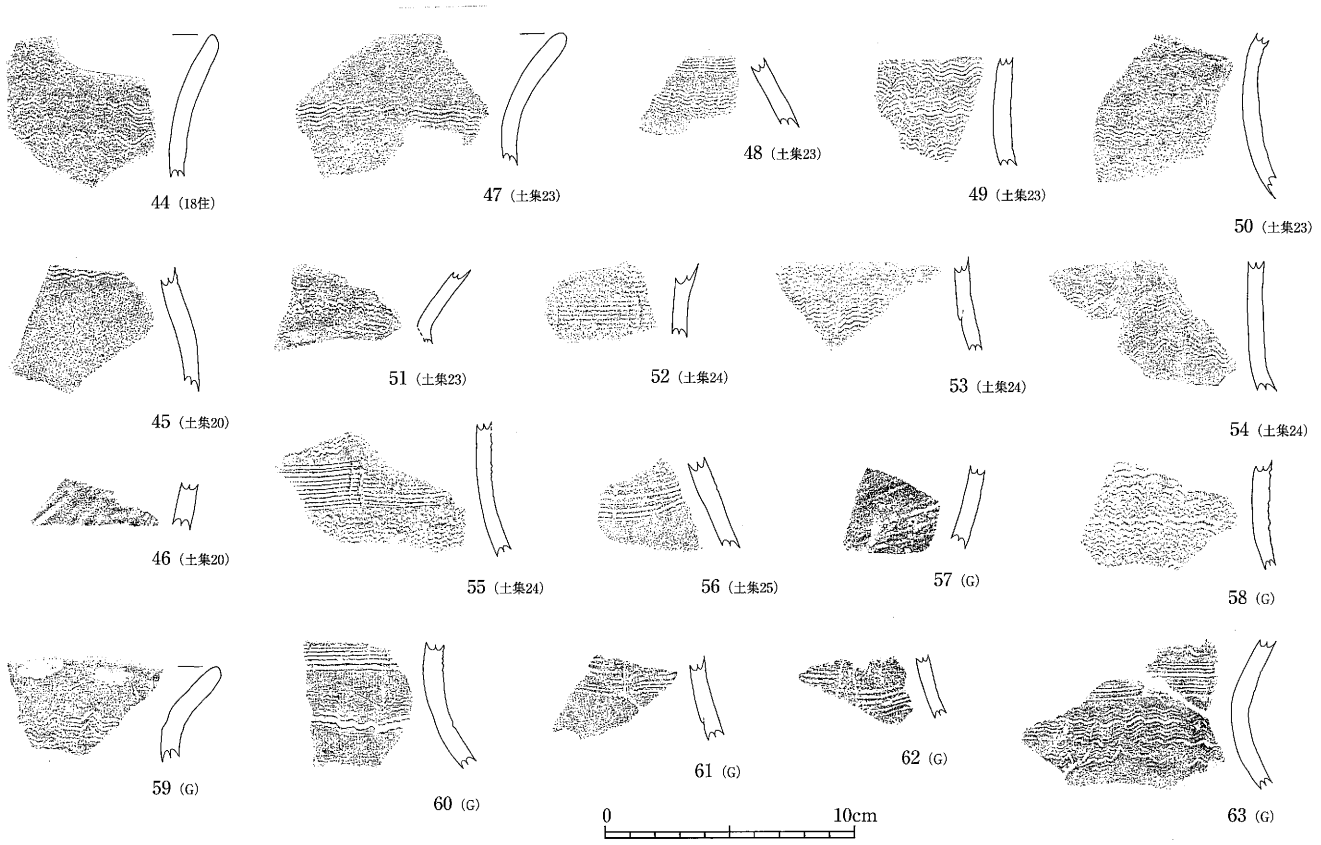
有孔で円板状の土製品が2点出土している。42は小形で焼成前穿孔、外周部も残っている。43は大きめの土器の一部を用いたような緩い湾曲を持ち、外周部は打ち欠いて円形にしているが、中央の穿孔は焼成前になされているように観察される。いずれも紡錘車と推定する。


1（18住）
2（18住）
3（18住）
4（18住）
5（18住）
6（18住炉）
7（18住）
8（土集20）
9（土集21・23）
10（土集23）
11（土集23）
12（土集23）
13（土集23）
14（土集23）
15（土集23）
16（土集23）
17（土集23）
18（土集23）
19（土集23）
20（土集23）
21（土集24）
22（土集24）
23（土集24・G）
24（土集24・西壁）
0
10cm

第6図　出土土器実測図



第７図　出土土器・土製品実測図



第8図　出土土器拓影

Ⅳ　調査のまとめ

1　出川西遺跡について

出川西遺跡は広い範囲にわたり、過去に出土遺物も弥生・古墳・平安の各時代のものが出土しているにもかかわらず、その内容が今ひとつはっきりしない遺跡であった。その原因の最大のものは戦時中から現代におよぶ構築物の建設・改廃による撹乱の広がりと、現在までほとんどの遺跡範囲が工場用地として利用されていることにあった。このような中にあって、今回、同遺跡の第Ⅷ次発掘調査が実施できたうえに、遺構・遺物が検出できたことは幸いであった。

今回の調査地は遺跡全域からみると、ほぼ中央部の西寄りにあたる。遺構は弥生時代後期の竪穴住居址であるが、周辺の土器集中地点の時代も出土土器からみてほとんど同時期と考えており、弥生時代後期の集落址の一端を捉えたものとみたい。ただし、わずかではあるが古墳時代前期の土師器も出土しており、層位的に微妙な重なりがある可能性も残った。また、弥生時代中期初頭から中葉に遡る破片も散見され、周辺に同時期の遺構がある可能性も匂わせた。

第２表　出川西遺跡Ⅷ出土弥生土器一覧表

No.	地点	器種	寸法		残存度	紋様・調整		実測番号	注　記
			口径	底径		外面	内面		
1	18住	高杯	15.1		口1/2	ミガキ、赤彩	工具ナデ、ミガキ、赤彩	1住2	005
2	18住	甕			胴1/3	工具ナデ摩滅、櫛描波状紋	ミガキ摩滅、指圧痕	1住6	18住002
3	18住	甕	11.8		口1/20	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検2	062
4	18住	底部		7.9	底1/3	工具ナデ、ナデ	摩滅	1住3	048
5	18住	甕		5.0	底完	ミガキ摩滅	横ミガキ	1住1	048
6	18住（炉）	壺	20.9		口2/3	ハケメ後櫛描簾状紋・波状紋	ハケメ	1住7	18住001・002・005
7	18住	壺底部		9.5	底僅	工具ナデ後縦ミガキ	工具ナデ	1住4	049
8	土集20	甕	21.0		口1/14	ナデ後櫛描波状紋摩滅	摩滅	Ⅱ検14	045
9	土集21・23	甕	20.0		口5/8	櫛描波状紋、工具ナデ摩滅	上半横ミガキ、下半工具ナデ摩滅	Ⅱ検23	063・069
10	土集23	甕	15.6		口1/8	ナデ後櫛描波状紋摩滅	工具ナデ	Ⅱ検13	G004
11	土集23	甕	17.2		口1/6	工具ナデ後櫛描波状紋	ミガキ摩滅	Ⅱ検8	016・G006
12	土集23	甕	15.3		口1/4	摩滅	横ミガキ	Ⅱ検9	065・067
13	土集23	甕	14.4		口1/5	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検1	013・G007・G008
14	土集23	壺	22.0		口1/6	摩滅	横ミガキ摩滅	Ⅱ検5	064・077
15	土集23	壺			頸1/5	工具ナデ摩滅	ミガキ、指圧痕、工具ナデ摩滅	Ⅱ検15	067
16	土集23	底部		6.9	底3/4	工具ナデ摩滅	工具ナデ摩滅	Ⅱ検19	092・098・G028
17	土集23	壺		7.2	底1/4	縦ミガキ摩滅、赤彩	工具ナデ	Ⅱ検24	G004
18	土集23	壺底部		12.3	底1/5	ハケメ・工具痕摩滅	ナデ	Ⅱ検21	G028
19	土集23	甕		7.6	底完	摩滅	ミガキ摩滅	Ⅱ検22	007・G006・G007
20	土集23	甕	19.6		口1/3	工具ナデ・ハケメ後櫛描波状紋、下半斜～縦ミガキ	上半ハケメ後工具ナデ後ミガキ、下半工具ナデ	Ⅱ検28	069・070・073・096・103・106・117・G007・G028
21	土集24	甕	24.0		口1/3	櫛描波状紋摩滅	工具ナデ	Ⅱ検29	001
22	土集24	鉢（甑）	17.6		口1/6	摩滅	ハケメ状の工具ナデ	Ⅱ検3	G017
23	土集24・G	甕	23.7		口1/6	櫛描波状紋、ナデ	工具ナデ摩滅	Ⅱ検6	G018・G020
24	土集24・西壁	壺	17.5		口1/6	櫛描Ｔ字紋、円形浮紋、縦ミガキ、赤彩	横ミガキ、工具ナデ、口縁部赤彩	Ⅱ検31	004・079・143・G015・G017
25	土集25	甕	18.5		口1/5	櫛描波状紋	摩滅	Ⅱ検16	114
26	土集25	高杯脚		9.0	底1/3	縦ミガキ、赤彩	工具ナデ	Ⅱ検27	110
27	土集25・G	壺底部		9.2	底1/4	ハケメ、指圧痕後工具ナデ	ナデ摩滅	Ⅱ検20	G031・G036
28	土集25	甕	20.6		口1/8	ナデ後櫛描波状紋	横ミガキ	Ⅱ検-4	G060
29	G	高杯	20.3		口1/12	ナデ後ミガキ、赤彩	ナデ後ミガキ、赤彩	Ⅱ検26	G037
30	土集22・23・26・G	壺			胴1/3	ハケメ摩滅	工具ナデ摩滅	1住5	029・030・035・036・038・039・064・072・087・088・116・G009・G022・G023・G066
31	土集26・G	甕	19.9		口1/4	ナデ後櫛描波状紋	ミガキ摩滅、口唇複節縄紋	Ⅱ検17	032・G037・G043
32	G	壺			頸1/4	ナデ後櫛描Ｔ字紋	ミガキ摩滅	Ⅱ検10	G001
33	G	甕	16.2		口1/10	櫛描波状紋	ナデ	Ⅱ検30	G112
34	G	底部		6.7	底完	工具ナデ後ミガキ	横ミガキ	Ⅱ検18	G002
35	G	壺底部		8.4	底略完	工具ナデ、ハケメ後ミガキ	工具ナデ摩滅、ナデ	Ⅱ検-7	118
36	G	甑		4.0	底5/6	摩滅	工具ナデ	Ⅱ検11	119
37	B区	底部		6.2	底1/4	ナデ	ナデ	B-1	B003
38	試掘	甑		5.0	底完	工具ナデ	ナデ	試掘1	T17-007
39	試掘	甕		7.6	底3/4	工具ナデ摩滅	ナデ	試掘2	T16-004
40	G	小型器台	10.1		口僅	摩滅	ミガキ摩滅	Ⅱ検25	G032
41	B区	甕	19.6		口1/6	ヨコナデ、工具ナデ	指圧痕、ナデ、工具ナデ	B-2	B001・B002
42	G	土製品			1/2	ナデ、穿孔後ナデ	直径4.1cm、厚さ0.9cm	Ⅱ検32	G039
43	土集25	土製品			3/5	焼成前穿孔、外周打欠き成形	直径9.1cm、厚さ0.7cm	Ⅱ検33	112
44	18住	甕口縁			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-36	063
45	土集20	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-47	G087
46	土集20	甕胴部			拓影	太い斜条痕	工具ナデ	Ⅱ検-48	G087
47	土集23	甕口縁			拓影	ナデ後櫛描波状紋	ナデ	Ⅱ検-37	095
48	土集23	壺胴部			拓影	櫛描横線紋・波状紋	ナデ	Ⅱ検-39	G008
49	土集23	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	ハケメ	Ⅱ検-40	G004
50	土集23	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ摩滅	Ⅱ検-42	G028
51	土集23	甕頸部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-44	G006
52	土集24	甕頸部			拓影	ナデ後櫛描簾状紋・波状紋	ナデ	Ⅱ検-34	121
53	土集24	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-35	130
54	土集24	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	斜ハケメ	Ⅱ検-38	G003
55	土集24	甕頸部			拓影	ナデ後櫛描簾状紋・波状紋	工具ナデ摩滅	Ⅱ検-46	G030
56	土集25	壺胴部			拓影	櫛描Ｔ字紋	工具ナデ	Ⅱ検-45	G055
57	G	甕胴部			拓影	太い斜条痕	工具ナデ	Ⅱ検-41	G027
58	G	甕胴部			拓影	ナデ後櫛描波状紋	工具ナデ摩滅	Ⅱ検-43	G005
59	G	甕口縁			拓影	ヨコナデ、櫛描波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-49	G031
60	G	甕頸部			拓影	ハケメ後櫛描簾状紋・波状紋	工具ナデ	Ⅱ検-50	G088
61	G	壺胴部			拓影	櫛描Ｔ字紋	工具ナデ	Ⅱ検-51	G107
62	G	壺胴部			拓影	櫛描Ｔ字紋	工具ナデ	Ⅱ検-52	G107
63	G	甕頸部			拓影	ナデ後櫛描簾状紋・波状紋	ハケメ状工具ナデ	Ⅱ検-53	G096

※地点に区名がない場合は試掘を除きすべてＡ区

遺跡を広域的にみると、平成8年に大規模に実施した第Ⅵ次調査は、今回調査地の150m西に位置するが古墳時代の祭祀跡と推定される土器集中地点19ヵ所が検出された他には包含層に遺物は非常に少なく、今回調査地と様相を一変させている。一方、東方250mにおける平成5年度の第Ⅱ次調査は、弥生時代中期後半の遺構と遺物が主体となっており、同じ遺跡内にあっても地点が異なるごとに違う様相を見せている。これらのことからみると、遺跡の西部一帯は古墳時代中期の祭祀遺跡、中央部西寄りは弥生時代後期の集落址、中央部には弥生時代中期の集落址が展開していることが想定でき、奈良・平安時代などの新しい時期はこれらの範囲には薄く、遺跡の東部域に偏っていることがわかる。

出川西・出川南遺跡の弥生期から古墳期の遺跡が、芳川小屋付近に発し、南松本一帯に流下していた奈良井川の網状の分流に依拠していたこと、それが徐々に乾いて奈良・平安時代に至ったことが、今回の調査でも想像できると考える。

2　弥生土器について

弥生時代後期の土器を詳細に見ると、後期初頭～前半の壺・甕ともにみられる櫛描斜走短線紋が全く認められないことがわかる。このことから総体的には後期中葉以降に位置づけられる資料と考えてよいであろう。しかし、壺の櫛描Ｔ字紋に櫛描横線より歯数の少ない原体が使われる傾向が顕著で、その点からみるとあまり後期後葉に下すことも難しい。後期中葉の資料として捉えていきたいと考えている。

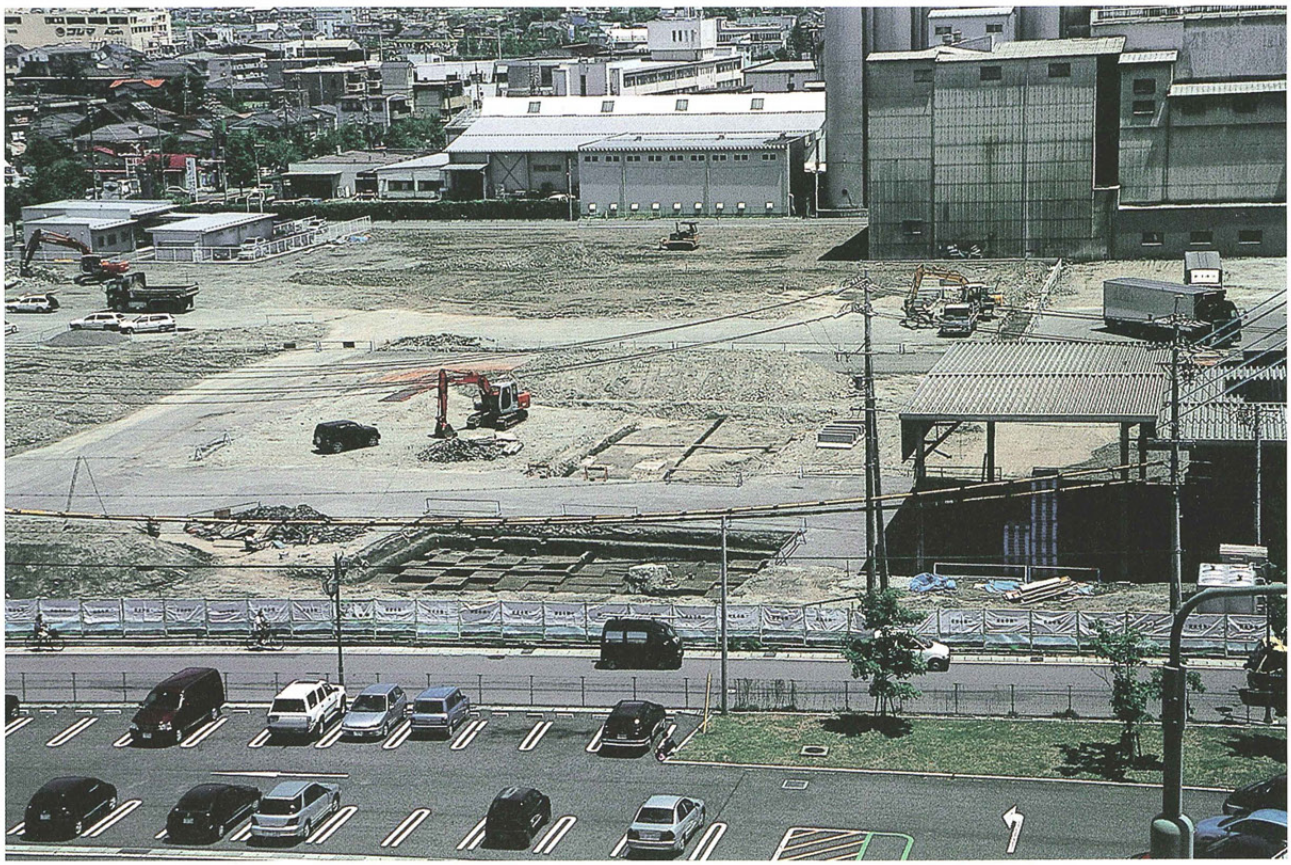
また、壺に頸部をＴ字紋で飾るもの（第6図24・第7図32・第8図56・61・62）と、多段帯状施紋（第6図6・第8図48）の2者が見られることも注目すべきである。千曲川水系の箱清水式に通有のＴ字紋とは全く異なる施紋原理の多段帯状施紋は後期前半からの強い地域色であり、その伝統を引くものとして理解したい。

次に、甕の頸部への櫛描簾状紋の採用頻度が低いことは本文中でも触れたが、千曲川水系の箱清水式に特徴的な頸部簾状紋を、本資料では欠いている現象は何を意味するのであろうか。先の壺の施紋の問題も含め、従来から、千曲川水系と天竜川水系の弥生時代後期土器群の比較の中で、中間地域である松本・諏訪の様相が問題となっていた。今回のように、横位に櫛描波状紋を重ねる点では、箱清水式に近い存在を暗示しながらも、施紋の核となる頸部簾状紋を欠くことは、地域的な強い特性とみたい。

神村透氏によって諏訪湖北の資料で橋原式が提唱されて久しいが、その複合した実態解明はいまひとつであり、現在、松本・塩尻での資料の集積が待たれるところである。その点で、今回資料は、一括性においては二級品であるが、総体的な傾向の中では弥生時代中期中葉における地域色を強く示しているといえよう。

最後になりましたが、今回の調査にご協力いただいた株式会社東祥及び関係者、調査協力者に謝意を表し、結びといたします

調査地遠景



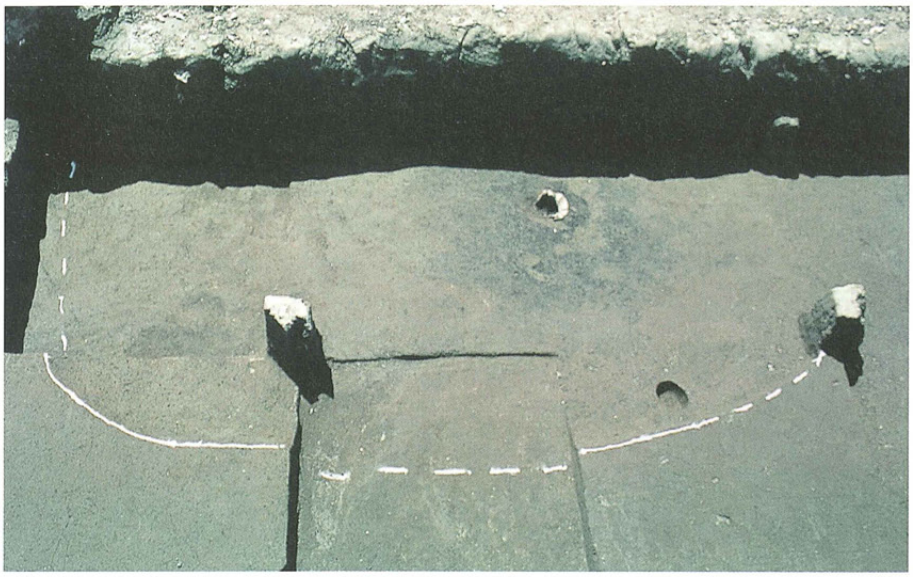
調査地全景

写真　図版１

A区全景（北から）

B区全景（東から）

写真　図版 2



第18号住居址

同上住居炉

同上炉下部

写真　図版 3

土器集中地点22

土器集中地点23

B区土師器甕出土

写真　図版 4

6

2

1

9

20

24

26

41

写真　図版 5

長野県松本市　出川西遺跡Ⅷ　緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　いでがわにしいせきはち　きんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　出川西遺跡Ⅷ　緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№181
編著者名	直井雅尚
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-0874　長野県松本市大手3丁目8番13号　大手事務所 （記録・資料保管：松本市立考古博物館　〒390-0823　松本市中山3738-1　TEL0263-86-4710）
発行年月日	2006（平成18）年3月24日　（平成17年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いでがわにし 出川西	松本市南松本（みなみまつもと） 2丁目139番1他	20202	176	36度 12分 35秒	137度 57分 58秒	20040412～ 20040528	458㎡	店舗建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出川西	集落跡	縄文	なし	なし	弥生時代後期の集落址。土器集中地点と遺物包含層が発達。
		弥生	竪穴住居址1（18住） 土器集中地点7（20～26）	弥生土器 （整理用コンテナー4箱）	
		古墳	なし	土師器2点	
		奈良・平安	なし	なし	
		中世	なし	なし	

松本市文化財調査報告　№181

長野県松本市　出川西遺跡Ⅷ　緊急発掘調査報告書

発行日　平成18年3月24日
発行者　松本市教育委員会　〒390-0874　長野県松本市大手3丁目8番13号
印　刷　株式会社綜合印刷　〒390-0874　長野県松本市大手3丁目7番11号